

<書評>

ジョセフ・A・ラワリーズ著

『科学・道徳・モラロジー』

チャールズ H. ドビンソン

本書は、ジョセフ・ラワリーズ教授の傑作ではないとしても、その榮譽を担いうる候補作であることは確実である。最終判断は、時の経過と他の学者たちの意見によって下されるであろう。ラワリーズ教授が踏み込んでいるいくつかの領域に関して筆者がもっている知識では、ラワリーズ教授が、古今東西の思想を見事に結びつけて提示しているいくつかの考えを正しく評価するには不十分である。今日では、このような課題に進んで取り組もうとする人も、あるいはそれのできる人もほとんどいない。また実際それに取り組んだとしても、その成功の程度たるや、本書に見られる成功とは比べものにならないであろう。

ラワリーズ教授は、科学と人文学の分野で高い資格を保有している。教授は、純歴史学的領域や、考古学上の事実や推測を論ずる場合と同じほどの気軽さで、立体幾何学を人間の思想の諸側面に応用して論じ、その相互関係を説明してのけるのである。このような融通無碍な思考の持ち主は極めてまれである。5つの特別講演で構成された本書において、ラワリーズ教授の偉大で稀有な天分が、宗教と人間行為との考察に向けられたことは、人間性の前進である。勿論、これらの問題は、人間存在の中心的な問題である。しかし、過去の世紀においては、人間の踏み行なうべき確固たる指針が存在したので

あるが、科学がそれらの多くを蝕んできた。今日、人間の生活は、幾多の問題に直面しており、それが指針的慣習の根底を腐食しつつある。そこでこうした問題に正面から立ち向かい、それを分析して解決策を見出しそうとする者は、まさに本書のような書物の助けを必要とするのである。したがって、本書を手にする事の出来るすべての知的戦士が、モラロジー研究所に対して、その出版を感謝するであろう。

初めの4つの講演は日本で行なわれ、「教育と道徳」と題する5番目の講演は、カナダのノヴァ・スコシア州、ハリファックス市にあるセント・メリー大学で行なわれた。初めの4つは、広池千九郎が創建したモラロジーの創建50年記念にちなんだものである。広池千九郎は天分に恵まれた学究であり、最も活力に満ちた時期に、彼は世界の最も重要ないくつかの宗教の中から、そのすべてに共通し、かつ科学的に、しかも深い尊敬の念をもって研究しうる原理を発見することに没頭した。ラワリーズ教授の言葉を借りれば、「彼（広池千九郎）は、例えば、真に科学的な結論は、いつでもどこでも当てはまることに注目しました。物理学の法則は月で起こることも、シリウス星で起こることも説明します。それは現在はもちろん、百万年前にも、また遠い未来においても正しい陳述です。同様に、正しい行為と不正な行為や、道徳と不道徳に関する法則も、いつでもどこでも適用されなければなりません。彼はこうした法則を確立することが可能であるに違いないと考えました。彼はこうした法則で構成された体系をモラロジーと呼んだのです。ちょうど物理工学が橋や高層建築物の建築法を教えるように、モラロジーは美しい都市や正しい社会の建設法を人々に教えるでしょう。……因果律が、物理学や化学の分野と全く同様に、道徳の分野にも作用するという考えに立ち、人生を向上させる正しい原理が十分に受け入れられることが、健全な社会と個人の幸福な生活をもたらすことを示そうと絶えず努力しました。」

それゆえ、ラワリーズ教授の日本での各講演の終りの方では、広池千九郎のいう最高道徳の六大原理が、今日、個人と社会を悩ませているほとんどの問題の解決を促進するうえで如何に有益であるかを示している。その結果、

読者は広池千九郎自身の原著作、あるいはせめてその思想の要約でもよいのだが、そうしたものに当たってみたいという渴望を禁じえないのである。しかし、それについては、ラワリーズ教授は、5番目の講演になるまで、読者に教えてくれないのである。しかも、日本語から英語や、ドイツ語、あるいはその他の言語へ翻訳した簡潔な文献の入手法や入手先を巻末の付録に示すこともしていないのである。今日の難問を抱えた世界に対するモラロジーの重要性からして、また広池千九郎は、ラテン語やギリシャ語が読めたばかりでなく、英語とドイツ語を書くことができたということからして、そのような翻訳書が出ていることはほとんど確実である。

各講演のテーマをあげてみると、まず最初は「科学・道徳・モラロジー」である。これは書名にもなっている。まず、本書で用いられている「道徳」とか「不道徳」という言葉は、今日、新聞その他のマスメディアで用いられているようなセックスに関する行動という意味に限定されてははいないということを確認しておくことが重要である。逆に、こうした言葉は人間行動の全領域に適用されている。従って、2番目の講演でラワリーズ教授が、「ヨーロッパと北アメリカの学生と青年」について語る時、教授は、若者たちの個人的な問題のみならず、今日彼らを悩ませている政治的、産業的、社会的諸問題に関心を寄せているのである。また、「現代世界の道徳的責務」では、産業都市の果てしない膨脹や、「防衛」の美名の下に、原子兵器の装備や、神経ガスや病気を蔓延させる方法の開発などを行なって、戦争に備えるという偽善的なやり方に対して、正邪の道徳的検討を加えている。さらに、人間の無思慮から起こる動物界のさまざまな種の絶滅、大気や海洋の汚染、「産業活動」の非論理的な解釈によるストライキという武器の無制限的使用等に対しても、同様の道徳的検討を加えている。

「モラロジーと家庭」という講演では、ラワリーズ教授は、現代の家庭生活の幾多の事例の中に、多くの嘆かわしい事態を見出ししている。しかし、彼は自らが、ローマ人の言う「往時の称賛者」、つまり現在を正当に評価しないで、過ぎ去った時代を称賛する人であることを示している。聖書の「伝

道の書」は、このような人を次のような言葉で戒めている。「昔が今よりもよかったのはなぜか、と言うな。あなたがこのことを探求するのは賢明なことではないからである。」三、四百年前のイギリスの村落における家庭生活について、ラワリーズ教授が心に描いている光景は牧歌的である。「すべての人々は、非常に古くからあって、神に起源を有すると考えられている布告に裏付けられた、行動の規則や道徳的原理を受け入れることによって団結していました。……家庭は、最も悪い状態にある時には、確かに残忍なものでした。しかし、最も良い状況にある時は、慰めと愛情のある安らぎの場所であり、母親に幸福をもたらす子どもの養育にふさわしい場所でした。」そして彼は、これを現代の都市と対比させている。「現代都市はそれ自体、名もない個人の巨大な集合体です。これらの人々には、〈おはよう〉と言えるほど親しい隣人はほとんどいない有様なのです。都会では、病人や非常に年老いた人々が、自分たちの要求や悩みを誰にも知られずに、空腹や渇きや寒さのために死んでしまうこともあります。ビルの中の一つ一つのアパートは、各人の悲惨な生活を包み込んだ孤独な部屋であり、人は他人と喜びや幸福の時を分かち合うことができません。」しかし、ラワリーズ教授が想像している黄金時代にも、人里から遠く離れた一軒家がたくさんあり、国立の保健施設や歯科診療施設といったものもなく、黒死病のような疫病が何世紀にもわたり、周期的に蔓延し、町や村の住民をほとんど全滅させたのである。

ラワリーズ教授は、北アメリカの現状に関して知り過ぎており、恐らくそのために、今日の家庭の姿を公平に描いていないくらいはあるけれども、家庭生活が崩壊の危機に瀕しており、それは個人の幸福のためにも、社会のためにも好ましくないという点は、我々も同意しなければならない。

広池千九郎の説く最高道徳の六大原理、特に自我没却を求める原理と、権利に対する義務の先行を求める原理は、今後の世界を大いに裨益することができるというのが、ラワリーズ教授の信念である。義務に関する後者の原理は、彼が今日行き過ぎになっていると考える「権利」の主張を差し控えることを求めているという。「18世紀の天賦人権説は、確かに人間を解放する役

割を果たし、多くの悪弊や不正を取り除きました。しかし、この思想は、実に危険な程度にまで進んでいきました。今日ではすべての人々が、他人の権利を無視して、自分の〈権利〉だけを主張しています。」

しかし、ラワリーズ教授が不満に思っているように見える小さな核家族について、次のような点を強調しておかなければならない。すなわち、主婦にとって、自分の知的能力を活かし、自分の人間性を全面的に伸ばし、また社会生活により大きな貢献をする機会が増えるばかりでなく、世界の人口が自発的に抑制されないうち、何百万もの人々が無用の苦しみを味わうことになるであろうということである。

「教育と道徳」と題する本書第五章は、歴史的にはつじつまが合わないが、愉快なことに、著者のそれまでの悲観論と対照的な楽観論を示す文章で始まっている。「道徳的、倫理的人格の形成は、いかなる学校においても、その活動のひとつの重要な部分であるという確信が一般に広がりつつあります。」この目新しい提言は、キリスト教教育修道会、特に、かつての、そして今なお続いているイエズス会の根本教義と相容れないことは確かである。イエズス会の会士にとって、教育は善き生活のための訓練であったし、また現在でもそうである。さらに、もし最近の数十年間のことに取り組みたいのであれば、卓越した教育家であるM. L. ジャックスが、既に1955年に書いた『善き人間の教育』という書物を思い起こすだけでよい。

この章では、ラワリーズ教授は、世界各国のさまざまな政治体制の下での、宗教と教育の多様な結びつき方を分析的に概観している。そこから彼は次のことを見てとっている。「あらゆる宗教の信徒は、世俗の研究の影響を受けたり、啓示を現代的に解釈することによって互いに接近し、また世俗主義者にも接近していきます。しかもつい最近までは全く不可能と思われていた程度まで接近してきているのです。……両者は、良心の自由を認めていることと、信仰活動の自由、あるいは信仰をもたない自由を認めている点で一致しています。すべての宗教に公然と敵対するマルクス主義者でさえ、共産党と（ロシア）正教会の平和的共存を認めたのです。」ここから、ラワリー

ズ教授はさらに筆を進めて、広池千九郎がモラロジーという科学によって推進しようとしたものは、すべての宗教が受け入れることのできるいくつかの基礎的原理の上立って、各宗教が互いに歩み寄ることである、と指摘している。ラワリーズ教授は、教師であり、大学教授でもあった広池千九郎の深遠な学問と、超人的な精力と、歴大な著作について語っている。その広池千九郎は、中国古典を修め、そこからさらに法制史の研究を行なった後、道徳哲学の研究に至り、1923年から1935年の間に、主著『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』という五冊の浩瀚な書物を著わした。ラワリーズ教授は、モラロジーの原理について非常に簡単な説明を加えており、また最高道徳の六大原理のそれぞれについて一行か二行ずつ述べているだけである。

これだけのことを知らされたからには、私達の知的好奇心はいやが上にもかきたてられるのである。今日世界各国が直面している問題は極めて似通って関連しあったものであり、人類の将来は、皮膚の色や信条や政治体制の如何を問わず、すべての人々の友好と協力という理想と切り離せない関係にあるが故に、モラロジーという科学は、世界平和実現の最も重要な手段の1つになり得ることは明白である。しかし、モラロジーは、もっと広く認識されることが必要であり、またその創立者に匹敵する能力と献身的精神を備えた人々によって発展させられなければならない。

ともあれ、モラロジーについて読み、モラロジーについて考えるすべての人々は、このモラロジーというテーマに自己の思索と心情を捧げることによって、モラロジー存立の精神に1つの貢献をしているにちがいない。それがたとえ些細な貢献であろうとも。

(訳：モラロジー研究所研究部研究員 岩佐信道)

モラロジー研究所刊、1976年、A5判、和文117頁、英文106頁。

SCIENCE, MORALS AND MORALOGY

by Joseph A. Lauwerys, D. Sc., D. Litt.

Kashiwa, Japan: The Institute of Moralogy, 1976

If this book is not the chef-d'oeuvre of Professor Joseph Lauwerys it is surely in the running for such an honour. Time and the opinions of other academic persons will decide the final judgment: the knowledge possessed by this reviewer, in several of the fields entered by Professor Lauwerys, is inadequate to enable him to weigh accurately some of the thoughts presented by Professor Lauwerys in his remarkable linking of ideas through millenia and today around the whole globe. There can be few men living who would, or could, have tackled such a task, and had they tackled it their degree of success is not likely to compare with what is found in this volume.

Professor Lauwerys holds high qualifications in the field of science and also in the field of arts: he is as much at ease in discussing three dimensional geometry applied to the planes of human thought and explaining their inter-relationship as he is in the purely historical field, or in the facts and surmises of archaeology. Such versatility is an exceedingly rare possession. It is to the advantage of humanity that the great and rare gifts of Professor Lauwerys have, in this book comprising five very special lectures, been turned to consideration of religion and human conduct. These, of course,

are the central matters of human existence, but whereas in centuries gone by there were firm guide lines for human beings to follow, science has eroded many of them and life today is beset by problems which gnaw at the bases of many guiding customs. So those who are willing squarely to face these problems, to analyse them and to seek solutions to them are in need of just such books as this to help them. Accordingly all such intellectual warriors as can get hold of this book will be grateful to the Institute of Moralogy for publishing it.

The first four lectures were given in Japan and the fifth, entitled "Education and Morality" was given at Saint Mary's University, Halifax, Nova Scotia. The first four lectures were associated with the fiftieth anniversary of the foundation of the Science of Moralogy by Chikuro Hiroike, a gifted academic, who in his most vigorous years devoted his thinking to discovering, among some of the most important religions of the world, principles which were common to them all and which could be approached in a scientific way, though with deep respect. In the words of Professor Lauwerys: "He (Chikuro Hiroike) noted, for example, that truly scientific conclusions apply everywhere and always. The laws of physics describe what happens on the Moon, or on the star Sirius, and they are statements as correct now as they were a million years ago or will be in the distant future. So, too, he felt, the laws describing right and wrong actions, morality and immorality, must apply everywhere and always. It should be possible, so he thought, to formulate these laws. He called the system formed by such laws Moralogy. Just as physical engineering provides instruction on how to build a bridge or a skyscraper, so too would Moralogy instruct human beings on how to build a beautiful

city or a just society.Accepting the notion that causality operated in the field of morals just as in that of physics or chemistry he endeavoured always to show that full acceptance of the correct and life-enhancing principles led to health in society and to happiness in the lives of individuals."

Accordingly, in the latter part of each of his lectures in Japan Professor Lauwerys shows how Chikuro Hiroike's six basic principles of Supreme Morality could be of service in helping to solve most of the problems that beset individuals and society today. As a result the reader finds himself thirsty to get at the original, or even the summarised ideas of Chikuro Hiroike, but Professor Lauwerys does not give us these until the fifth lecture. And he does not, in an appendix, tell us how and where to obtain a succinct translation from the Japanese into English, German or other languages. It is almost certain that such translations exist because of the importance of Moralogy for the troubled world of today and because Chikuro Hiroike could write in English and German, besides being able to read Latin and Greek.

The subjects of the lectures are firstly "Science, Morals and Moralogy" which gives the title to the book. It is important straightaway to stress that the words "moral" and "immoral" as used in this book are not limited in their meaning, as in newspapers and other media of today, to behaviour with regard to sex. On the contrary, they apply to the whole gamut of human behaviour. So when, in the second lecture Professor Lauwerys talks of "Students and Youth in Europe and North America" he is concerned with the political, industrial and social problems which beset young people today, as well as with their personal problems. And in "Moral

Commitment in Today's World" he applies the moral test of right and wrong to the unlimited expansion of industrial cities and to the hypocritical preparation for war under the title of "defence", by preparing atomic weapons and devising nerve gases and the ways to spread disease. Further he applies the same moral test to the heedless extermination of various species of animal life, to the pollution of air and oceans, and to the unlimited use of the strike weapon under the illogical description of "industrial action".

In his lecture "Morality and the Family", Professor Lauwerys finds much to deplore in many examples of family life today, but he shows himself to be what the Romans used to call a "laudator temporis acti", one who praises the times gone by without doing justice to the present time. The Book of Ecclesiastes in the Bible has an admonition for such people in these words: "Say not thou, what is the cause that the former days were better than these? for thou dost not enquire wisely concerning this." The picture that Professor Lauwerys paints in his mind's eye concerning family life in English villages three or four hundred years ago is idyllic: "The whole held together by the acceptance of rules of behaviour and moral principles of enormous antiquity, supported by edicts thought to be of divine origin.At its worst it was surely beastly. At its best it was a haven of comfort and affection, a good place for the raising of children that would bring happiness to their mothers." And he contrasts this with the modern city "itself an immense agglomeration of anonymous individuals who barely know their neighbours well enough to wish them good morning. In a city, sick persons or the very old may die of hunger, thirst or cold without anyone being aware of their need and trouble. Each apartment in a block is a lonely

cell enclosing its private misery and unable to share with others its moments of joy and happiness." But in the golden age which Professor Lauwerys imagines there were plenty of lonely cottages far away from the village and there was no National Health Service or Dental Service and plagues such as the Black Death would periodically, over the centuries, wipe out town and village populations almost completely.

Although Professor Lauwerys fails to paint a fair picture of the family of today, probably because he is too well informed regarding what goes on in North America, we have to agree that there is a danger that family life will fall to pieces and this will be as bad for society as for individual happiness.

The six principles of Chikuro's Supreme Morality could, Professor Lauwerys believes, help the world greatly in the decades ahead, especially the principles that call for unselfishness and the precedence of duty over rights. This latter principle, of duty, says Professor Lauwerys, is required to restrain the claim of "rights" which he believes has overstretched itself. "Undoubtedly the eighteenth century doctrine of the Rights of Man acted as a liberating force and it helped to remove many abuses and injustices. But it has been stretched to a truly dangerous degree. Everyone now claims his "rights" ignoring those of others."

But with regard to the small nuclear family with which Professor Lauwerys seems dissatisfied, we have to stress that not only is there greater chance for the wife to utilise her intellectual powers and develop her full personality, and make a greater contribution to the life of society, but also unless the world's population is voluntarily restrained in its growth unnecessary sufferings of millions of people will result.

The fifth chapter of the book, entitled "Education and Morality", commences with a statement that is historically incongruous but shows an optimism which conflicts pleasingly with his previous pages of pessimism. "There is a general and growing conviction that the formation of the moral and ethical personality is an important part of the business of any school." This suggestion of novelty surely conflicts with the basic tenets of the Christian teaching monastic orders, especially the Jesuits of long ago and still persisting. For them education *was* and *is* training for the good life. Moreover if we wish to tackle recent decades we have only to recall the book entitled *The Education of Good Men* written by the distinguished educator M. L. Jacks as long ago as 1955.

In this chapter Professor Lauwerys gives us an analytical survey of the various ways in which linkage of religion with education is attempted in various parts of the world and under various political systems. From this survey he sees that "The believers of all religions, influenced by secular research and modernising their interpretation of the revelation, approach each other and the secularists to a degree which not so long ago would have been deemed quite impossible.....The point where they all meet is the recognition of freedom of conscience, the freedom of the act or faith or of unbelief. Even the open hostility of the Marxians to any religion has given place to a peaceful co-existence of the Communist Party and the Orthodox Church in the Soviet Union." This leads Professor Lauwerys to point out that it is the approach of religions to one another on the basis of some fundamental principles acceptable to them all which was what Chikuro Hiroike hoped to promote by his Science of Morality. Lauwerys tells us of the deep learning, tremendous energy

and prodigious output of this teacher and university professor, educated in the Chinese classics and passing from them through the history and philosophy of Law to Moral Philosophy and producing between 1923 and 1935 his chief work in five thick volumes: *A Treatise on Moral Science: The First Attempt at establishing Moralogy as a New Science*. Then Professor Lauwerys gives us a very brief account of the principles of Moralogy and a sentence or two about each of the six great principles of Supreme Morality.

This information whets our intellectual appetite: the problems of nations today are so similar and so linked and the future of humanity so bound up with the ideal of friendship and collaboration between all people, whatever their colour, creed or political system, that the Science of Moralogy can clearly become one of the most important means of bringing about a peaceful world. But it needs to be known more widely, and it needs development by able and dedicated minds like those of its Founder.

Meanwhile everyone who reads about and think about Moralogy is probably, by dedication of thought and feeling to this subject, making a contribution, however small, to the cause for which it stands.

C. H. DOBINSON
Emeritus Professor of Education
University of Reading July 1977